

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和3年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第6号（9月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：[nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp](mailto:nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp)



## 農薬の安全使用に努めましょう

### 農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給  
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止  
(周辺住民等への危被害防止)  
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)  
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

## 農薬ラベルを確認しましょう

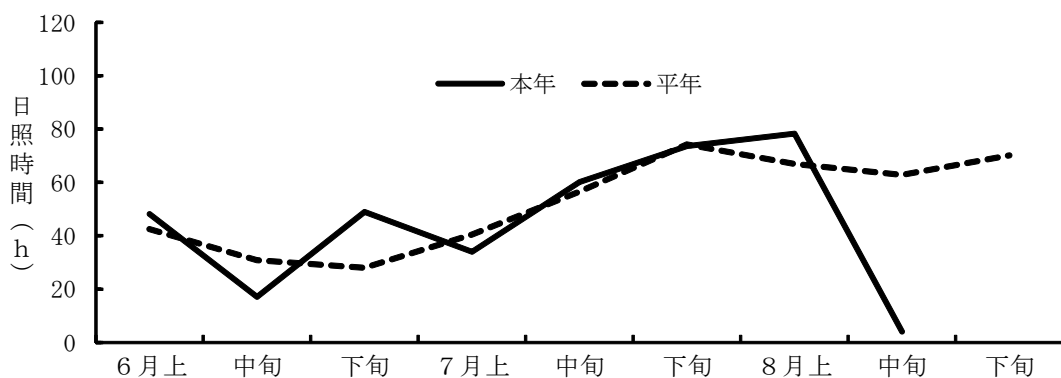
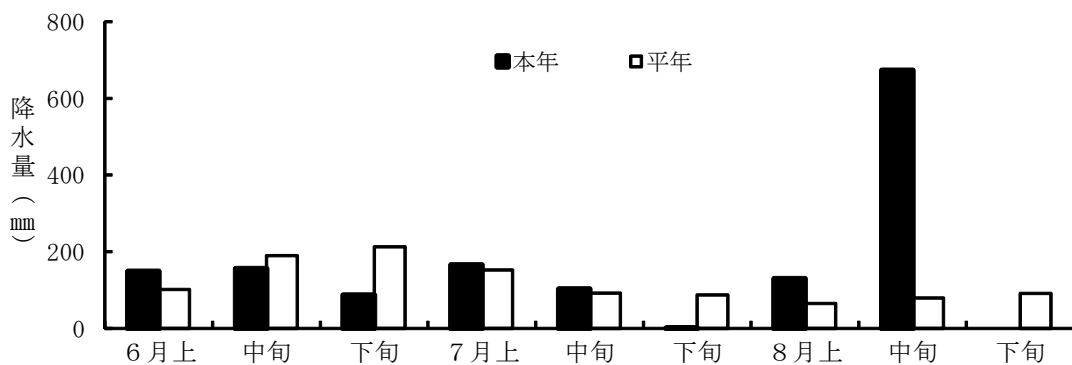
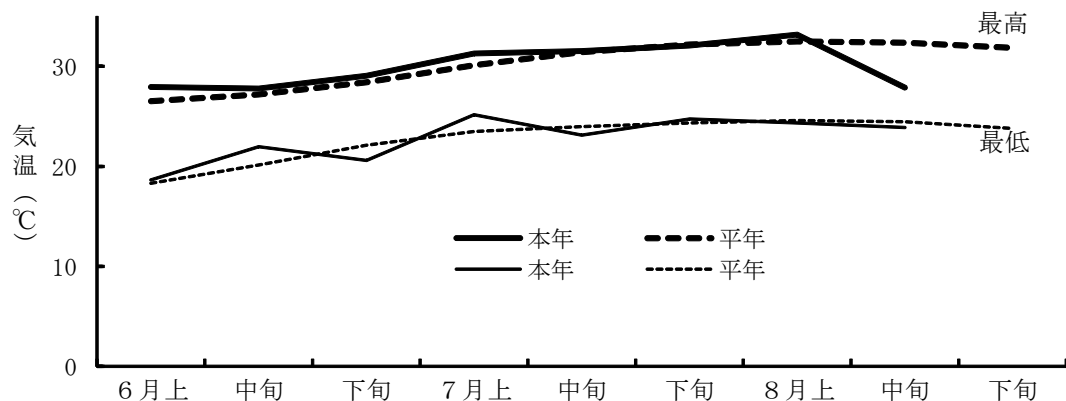
## 農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（8月28日から9月27日） 令和3年8月26日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	30	40	30	九州南部では、気温、降水量、日照時間ともに平年並みの見込み。奄美地方では、気温は平年並みか高く、降水量、日照時間は平年並みの見込み。
	奄美地方	20	40	40	
降水量	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	40	30	30	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	30	30	40	

II. 6～8月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



## 【病虫害発生予報の概要】

作物		病虫害名	発生量	
			現況	予報
普通作物	普通期水稻	いもち病（穂いもち）	やや多	やや多
		紋枯病	やや少	やや少
		トビイロウンカ	少	少
	サツマイモ	ナカジロシタバ	やや少	やや少
野菜	イチゴ（苗床）	炭疽病	並	並
		ハダニ類	少	少
	サトイモ	疫病	並	並
花き	キク	ハダニ類（県本土：施設）	並	並
		アザミウマ類（県本土：施設）	多	多
作物・野菜・花き共通		ハスモンヨトウ	やや少	並
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊本地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	並	並
		黒点病（県本土・熊本地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊本地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
茶樹	チャ	炭疽病	多	多
		網もち病	やや少	やや多
		チャノコカクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	やや少	やや少
		チャノミドリヒメヨコバイ	並	並
		チャノキイロアザミウマ	少	少
		カンザワハダニ	少	少
		クワシロカイガラムシ	並	並

## 【 病 害 虫 発 生 予 報 】

### I. 普通作物

#### 1. 普通期水稻

(1) いもち病（穂いもち）（令和3年度技術情報第13号（8月6日付け）参照）

ア 予報内容

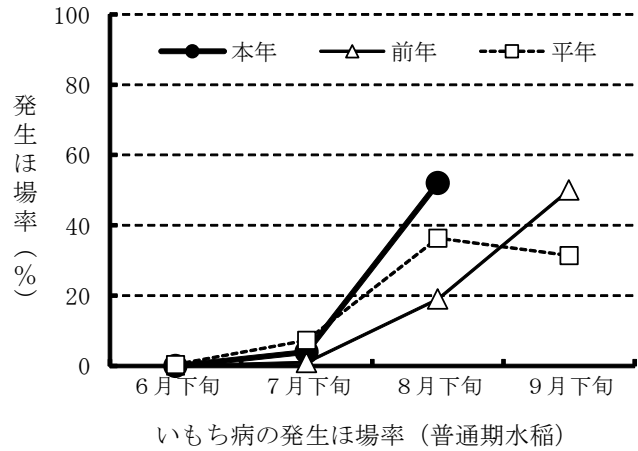
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
葉いもちの発生ほ場率  
52%（平年37%）：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 常発地等で葉いもちの発生が多いほ場では、穂揃期に液剤又は粉剤で補完防除を行う。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

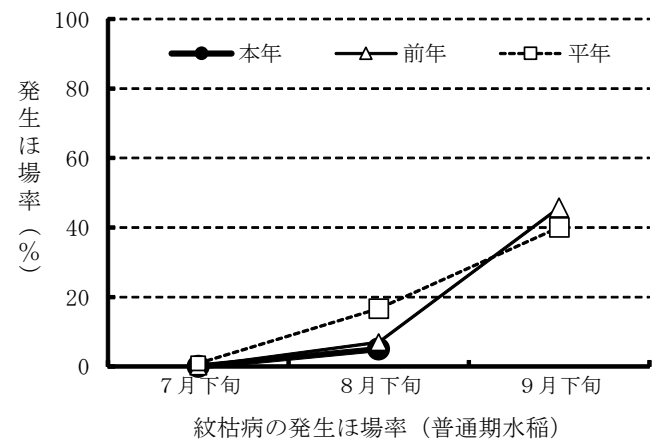
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率 5%（平年17%）  
：やや低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 現在発生が認められているほ場で出穂後も病勢が進展する場合は、早急に液剤又は粉剤で防除する。
- (イ) 昨年多発したほ場では、特に注意する。



(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

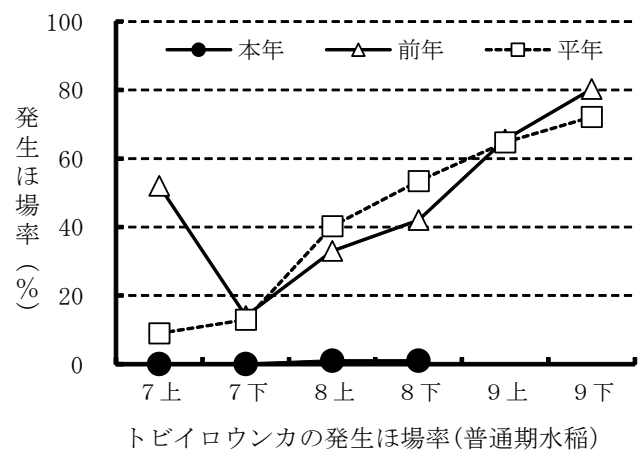
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：少  
発生ほ場率 1%（平年53%）：少

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) トビイロウンカは急激に生息密度が高くなることがあるので、発生に注意する。



## 2. サツマイモ

### (1) ナカジロシタバ

#### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

#### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率47%（平年59%）：並

糖蜜トラップでの誘殺虫数（7月～8月中旬 193頭(平年 561頭)）：少（－）

#### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。

(イ) 薬剤散布後も幼虫の発生量が多い場合は、追加防除を行う。

(ウ) ハスモンヨトウの発生が見られる場合は、同時防除が可能である。

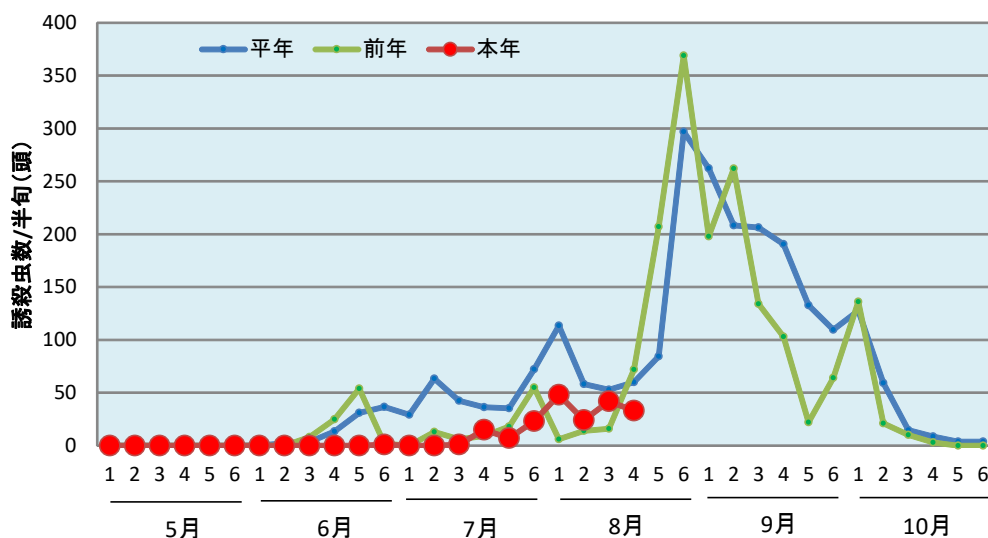


図1 糖蜜トラップでのナカジロシタバの誘殺状況（農業開発総合センター大隅支場データ）

※ 本年8月4半旬は19日までの合計で、平年はH23～R2の平均。

## 防除に関する今月の留意事項

### 1. サツマイモ

#### (1) サツマイモ基腐病

発生が見られたほ場では、次年度の発病リスクを軽減するために、以下の防除対策を徹底する。

#### <育苗床>（令和3年度技術情報第12号（7月19日付け）参照）

ア 残渣は次期作の伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処分する。

イ 育苗床に僅かに残った残渣の分解を促進するため、速やかに耕耘等を行う。耕耘は地温の高い夏場に複数回行う。また、土壌が乾燥している場合は、灌水を行ってから耕耘する。

ウ 育苗床は、地温15℃以上、適正な土壌水分（土壌を握りしめ、放したら数個に割れる程度）条件下で、殺菌効果のある剤（バスアミド等）による土壌消毒を行う。処理後直ちに必ずビニール等で被覆する。また、消毒後はガス抜きを十分に行う。

#### <本ば>（収穫後の残渣対策）

ア 屑イモや落梗は次期作の伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処分する。

イ 僅かに残った残渣の分解を促進するため、収穫直後に速やかに耕耘等を行う。耕耘は地温の高い夏場に複数回行う。また、土壌が乾燥している場合は、灌水を行ってから耕耘する。

## II. 野 菜

### 1. イチゴ（苗床：子苗）

#### (1) 炭疽病

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率20%（平年14%）：並

潜在感染圃場率45%（平年57%）：並

潜在感染株率 6%（平年16%）

：やや少（－）

##### ウ 防除上注意すべき事項

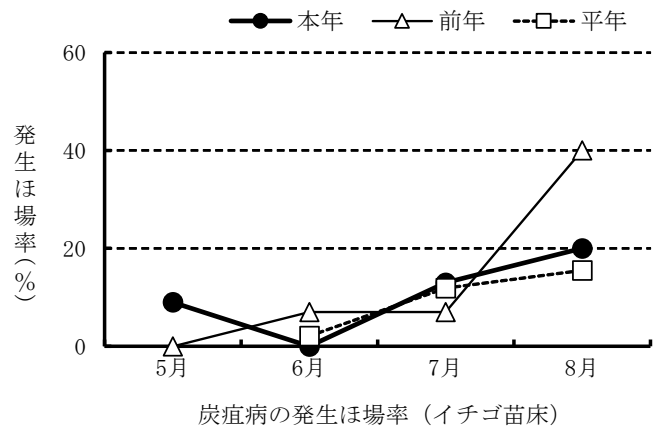
(ア) 萎凋した苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

また、それらに隣接している株についても併せて処分する。

(イ) 早めにランナーから切り離し、過湿とならないように適切な水管理に努める。

(ウ) 薬剤による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



#### (2) ハダニ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 少

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率27%（平年47%）：少（－）

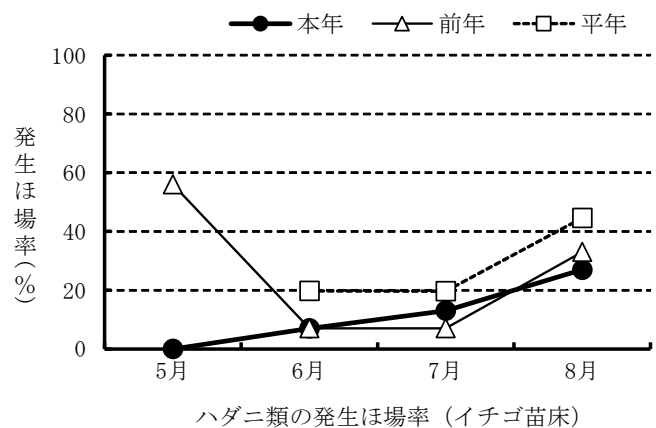
##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



### 2. サトイモ

#### (1) 疫病（令和3年度技術情報第11号（7月5日付け）参照）

##### ア 予報内容

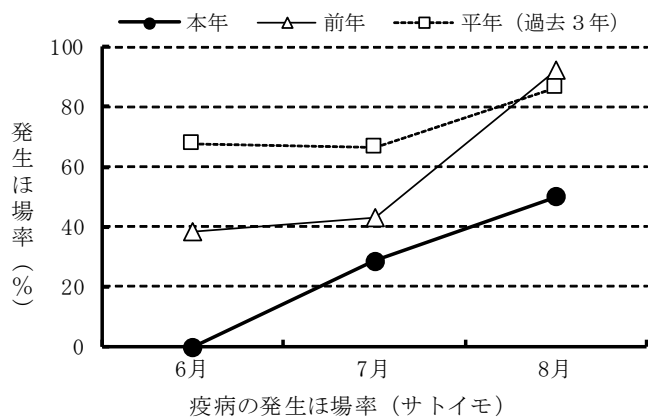
(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 50%



平均発病株率 86%

平均発病度 69

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、定期的な予防散布に努める。

(イ) ほ場の額縁部分から初発がよく見られるので早期発見に努め、発生を確認したら直ちに治療効果のある薬剤を7日間隔で複数回散布し防除を徹底する。

(ウ) 発病茎葉は発生源になるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。

防除に関する今月の留意事項

1. サトイモ (収穫後)

(1) 疫病

ア くずいも・親いも等の残渣は、ほ場や周囲に残ると発芽して翌年の発生源となるので、ほ場外へ持ち出し適正に処分する。また、茎葉等の残渣は早めにすき込み分解させる。

Ⅲ. 花き (キク)

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率40% (平年41%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

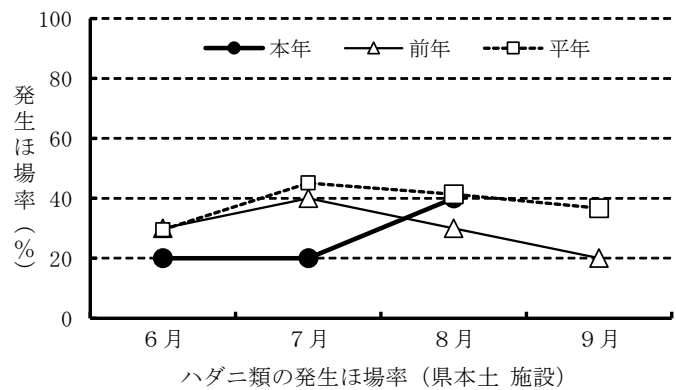
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等

でスポット状に発生する人が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率50% (平年29%)：多(+)

ウ 防除上注意すべき事項

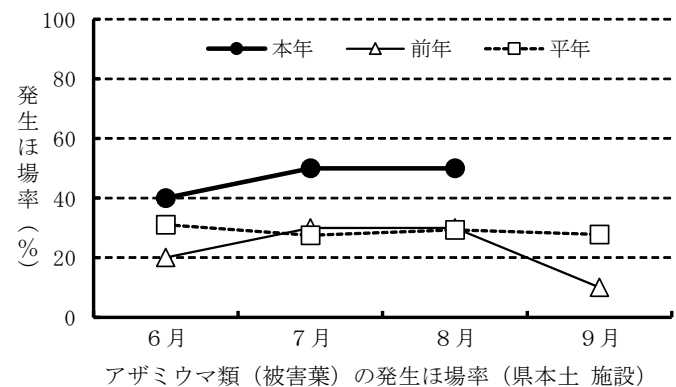
(ア) アザミウマ類はキクえそ病

(T S W V), キク茎えそ病

(C S N V)を媒介する。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス感染に細心の注意を払う。

(ウ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。



- (エ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (オ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。
- (カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。

#### IV. 作物・野菜・花き共通

##### (1) ハスモンヨトウ

###### ア 予報内容

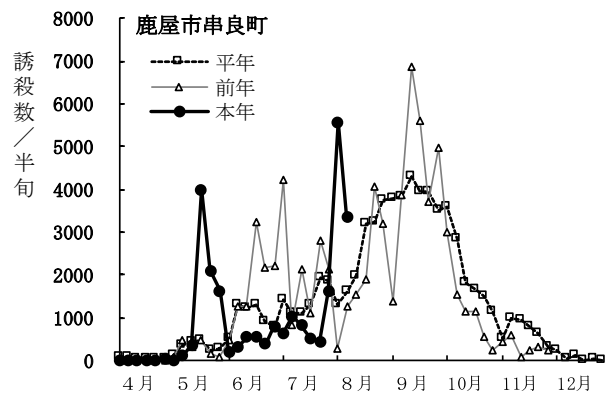
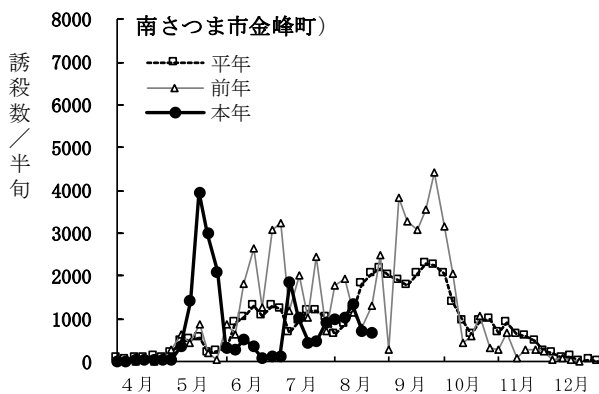
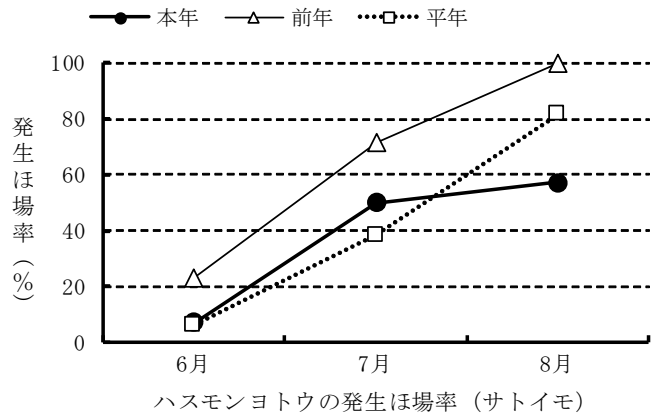
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 サトイモ、イチゴ、  
根深ネギ、キャベツ、  
マメ類、ダイズ、  
サツマイモ、キク等
- (ウ) 発生量 並

###### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
サトイモでの発生ほ場率57%  
(平年82%)：やや少(－)
- イチゴでの発生ほ場率 7%  
(平年16%)：やや少(－)
- フェロモントラップ誘殺数：並

###### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害(白変葉)するので、発生を目安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況



V. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや多

奄美地域(果実) 並

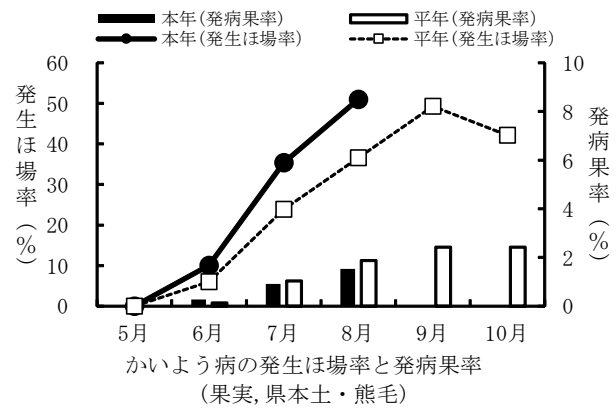
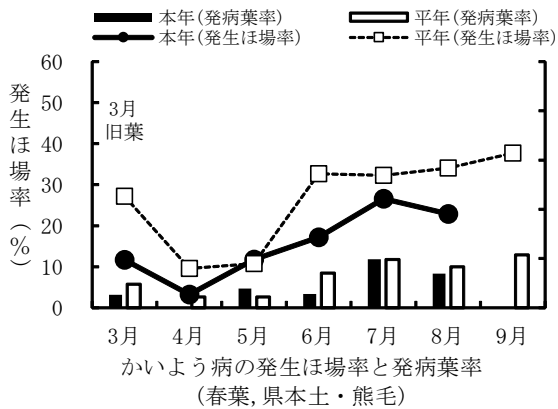
イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや多
発生ほ場率	23% (平年 34%) : やや低い (-)	51% (平年 37%) : やや高い (+)
発病率	1.4% (平年1.7%) : 並	1.5% (平年1.9%) : 並

ミカンハモグリガの発生ほ場率67% (平年82%) : やや低い (-)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 9%) : やや低い (-)	14% (平年 26%) : 並
発病率	0% (平年0.1%) : やや低い (-)	0.1% (平年0.7%) : やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので, ミカンハモグリガの防除を徹底する。

(イ) 台風の風傷害により発生が助長されるので, 台風前の防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 44% (平年 37%)

：並

発病果率1.9% (平年7.8%)

：やや低い(－)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 14% (平年 6%)：並

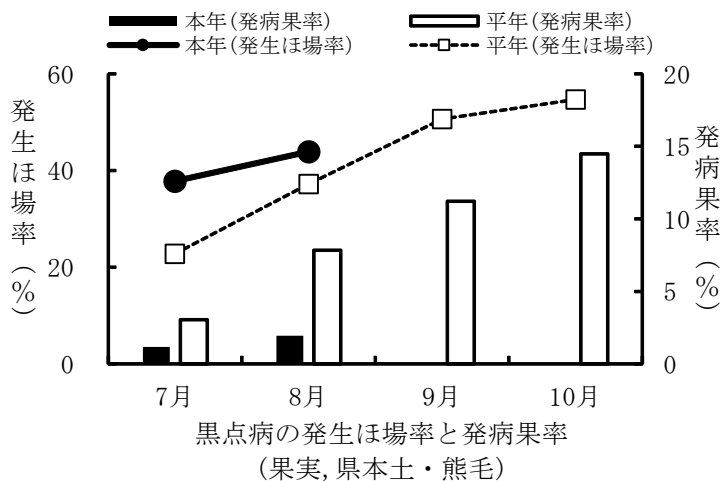
発病果率0.1% (平年0.6%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 後期黒点病対策として、多雨が予想される場合には予防散布を行う。

(イ) 薬剤の残効は降水量と散布後日数の影響を受ける。このため、次回の散布は累積降水量250～300mmに達する時期を目安に行う。ただし、累積降水量がこれより少なくても1か月程度経過したら次の散布を行う。

(ウ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 14% (平年 28%)

：やや低い(－)

寄生葉率1.4% (平年5.9%)

：低い(－)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

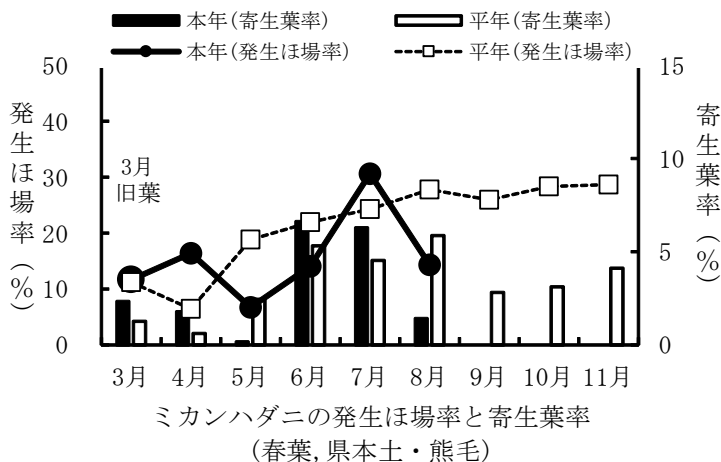
発生ほ場率0% (平年 6%)：並

寄生葉率0% (平年0.1%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5～1.0頭(寄生葉率で30～40%)を目安に防除する。

(イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。



防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 果実吸蛾類

果実吸蛾類は果実を吸汁・加害し腐敗落果させる。夜間に活動し果皮の薄い早生温州等に集まりやすい。

ア 網目0.5～1.0cmの防蛾網で被覆する。

イ 幼虫の食草となるアケビ、ムベ、アオツヅラフジ等を極力除去する。

ウ 毎年、被害が多いほ場では、ほ場全体が2Lux以上の明るさになるように蛍光灯を集団点灯する。

(2) サビダニ類

ア 県内のほぼ全域に生息するリュウキュウミカンサビダニは、秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。

イ 昨年秋季に多発したほ場では、同じほ場で発生する機会が多いので、防除に努める。

VI. 茶 樹

(1) 炭疽病（令和3年度技術情報第14号（8月19日付け）参照）

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率74%（平常54%）

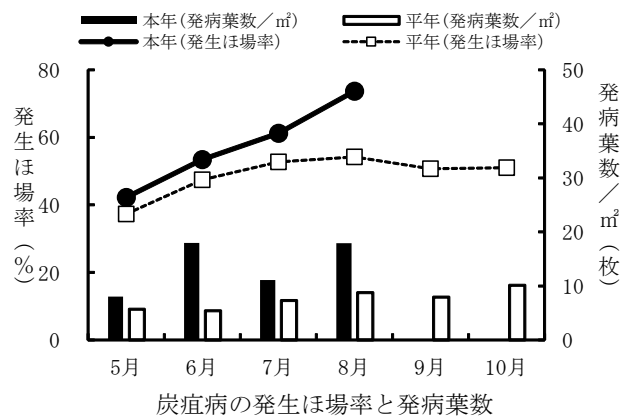
：高い（+）

1㎡当たり病葉数17.9枚（平常8.7枚）

：多（+）

8月上中旬の降水量802.5mm（平常143.9mm）

：多（+）



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 萌芽～1葉期に予防剤を散布したほ場では、3～4葉期に治療剤を散布する。

(イ) 萌芽期～1葉期に予防剤を散布していないほ場では、2～4葉期に予防剤と治療剤の混用散布を行う。

(ウ) 伝染源の病葉が少ないほ場でも、8月中旬の長雨により多発する恐れがあるので十分注意する。

(2) 網もち病 (令和3年度技術情報第14号 (8月19日付け) 参照)

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率0% (平年2%)  
：やや低い (-)

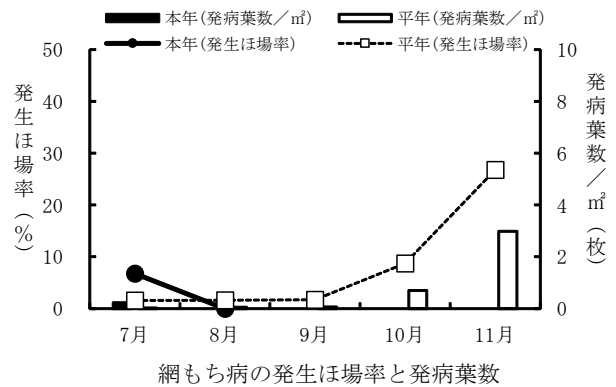
1 m<sup>2</sup>当たり病葉数0枚 (平年0.06枚)  
：やや少 (-)

8月上中旬の降水量802.5mm (平年143.9mm)  
：多 (+)

7月の越夏病葉の発生ほ場率7% (平年2%) : 高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。
- (イ) 炭疽病との同時防除が可能である。
- (ウ) 炭疽病に耐病性があり同病の防除を行わない場合、「あさのか」など本病に耐病性が弱い品種では発生に注意する。
- (エ) 更新園であっても、周辺に発生ほ場があると発病する恐れがあるので防除を行う。
- (オ) 常発園では、秋芽生育期後半に銅水和剤による追加防除を行う。



(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 並  
チャハマキ やや少
- (ウ) 発生時期 チャノコカクモンハマキ 早い  
チャハマキ 早い

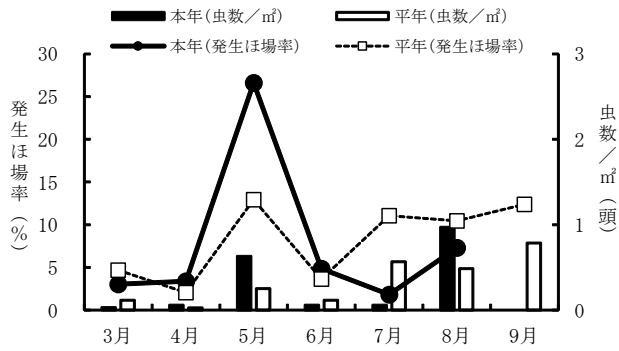
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果

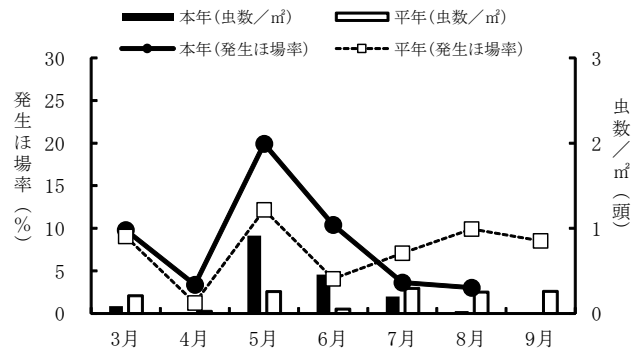
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
<b>【巡回調査】</b>		
発生量	並	やや少
発生ほ場率	7% (平年10%) : やや低い (-)	3% (平年10%) : やや低い (-)
虫数 (1 m <sup>2</sup> 当たり)	1.0頭 (平年0.5頭) : 多 (+)	0.03頭 (平年0.3頭) : やや少 (-)
<b>【知覧町フェロモントラップ】</b>		
誘殺数 (7月1半旬~8月4半旬)	1,061頭 (平年499頭) : 多 (+)	137頭 (平年212頭) : やや少 (-)
第三世代の発蛾ピーク	早い	早い

ウ 防除上注意すべき事項

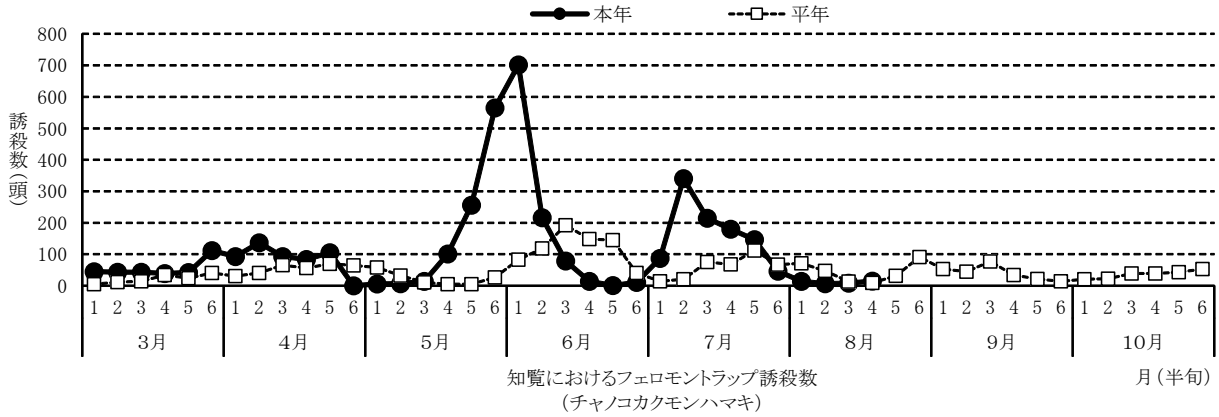
- (ア) 薬剤防除を行う場合、防除適期はふ化~2齢期 (発蛾最盛日の10~15日後) である。
- (イ) 近年、秋期に発生が多い傾向にあるので注意する。



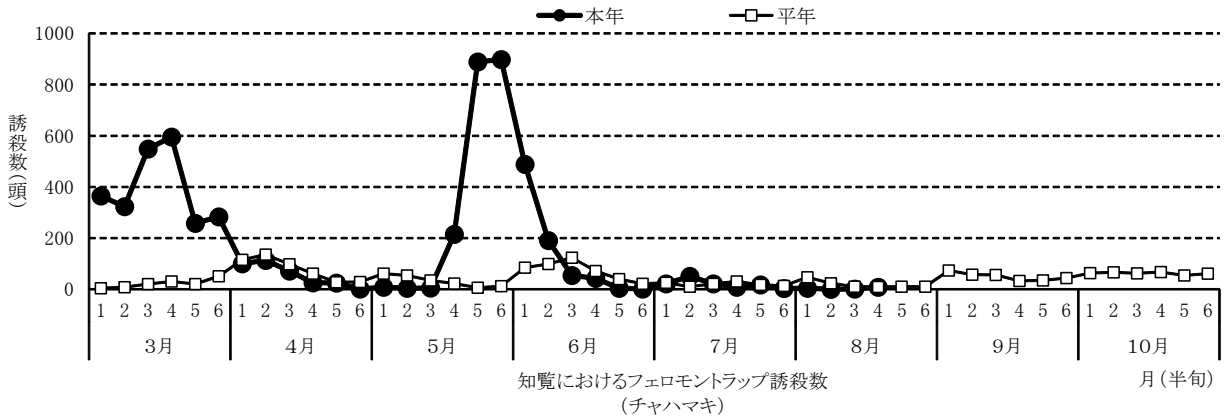
チャノコカクモンハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



知覧におけるフェロモントラップ誘殺数  
(チャノコカクモンハマキ)



知覧におけるフェロモントラップ誘殺数  
(チャハマキ)

(4) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 並  
チャノキイロアザミウマ 少

イ 予報の根拠

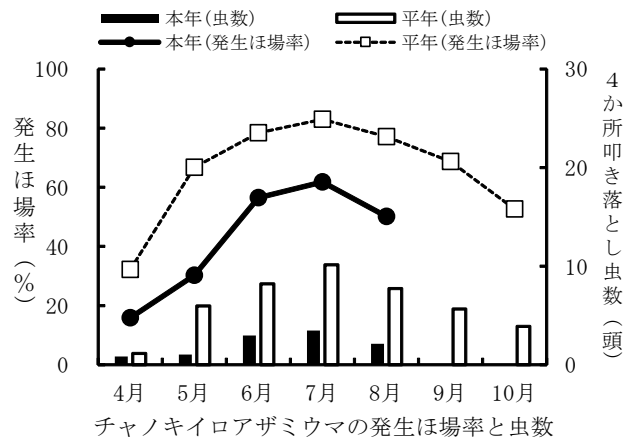
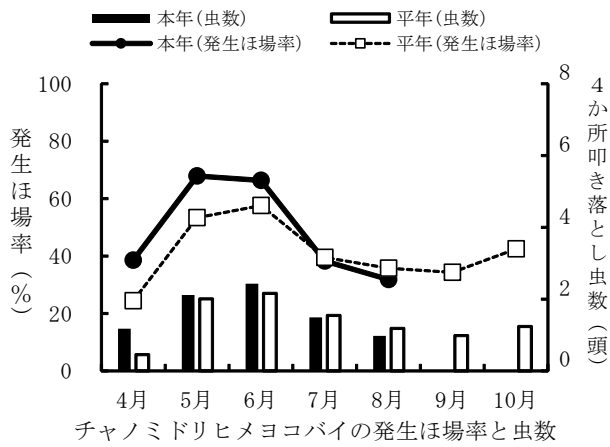
- (ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	並	少
発生ほ場率	32% (平年 36%) : 並	50% (平年 77%) : 低い (-)
虫数(4か所叩き落とし)	1.0頭 (平年1.2頭) : 並	2.1頭 (平年7.7頭) : 少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋芽での被害は翌年の一番茶への影響が大きいので、発生園では防除する。

(イ) 更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いので被害が継続し、樹体への影響も大きいので、芽の生育状態に合わせた防除を心がける。



(5) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

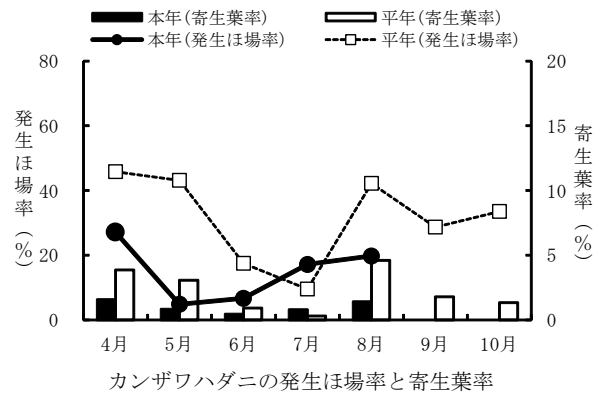
(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 20% (平年 42%)

: 低い (-)

寄生葉率 1.4% (平年 4.6%)

: やや低い (-)



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない薬剤を使用する。

(イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがあるので注意する。

(6) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

(ウ) 発生時期 早い

イ 予報の根拠

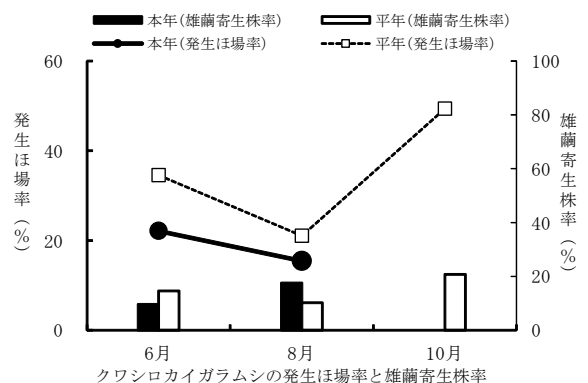
(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 15% (平年 21%)

: 並

雄繭の寄生株率 17.5% (平年 10.2%)

: やや高い (+)



(イ) 有効積算温度による防除適期（第三世代ふ化最盛期）予測

地 点	ふ化最盛期	
	本年	(参考) 前年
枕 崎	8月18日	8月28日
加世田	8月21日	8月27日
溝 辺	9月14日	9月19日
鹿 屋	8月29日	9月3日
志布志	8月31日	9月7日

注1) 予測には各地のアメダス観測地点における本年の日平均気温を用い（8月24日まで）、8月25日以降は各観測地点の平年値を用いた。

注2) 有効積算温度は各地のアメダス観測値より算出した第二世代ふ化最盛日の翌日を起算日として積算した。

注3) 高温による発育遅延を考慮し、最高気温が31.5℃以上の日は日平均気温に0.85を乗じて積算した。

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ふ化最盛日は地域によって差があるので、ふ化状況を調査し、ふ化最盛日を把握する。

(イ) 薬剤は、ふ化最盛日から5日以内に枝や株元に十分かかるように散布する。

(ウ) 更新園でのふ化最盛期の防除は、茶株内の枝幹へ薬液が付着しやすく、高い効果が期待できる。

.....  
防除に関する今月の留意事項

1. チャトゲコナジラミ

多発するとは場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

(1) 深刈り更新は、寄生葉が除去され密度低下が期待される。

(2) 薬剤防除は若齢幼虫期の効果が高い。

(3) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。

## 農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。  
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壤が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

### 「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。